

鉄の生産と流通からみた北方世界

鉄関連遺構の性格の再検討を通じて

The Northern Area in Japan as Seen through the
Production and Circulation of Iron

赤沼英男・福田豊彦

はじめに

- ① 出土遺物による鉄関連遺構の再検討
- ② 北方世界における出土鉄器の組成
- ③ 文献からみた鋼精錬の位置と鉄素材の流通形態

【論文要旨】

わが国の鉄の歴史は、考古学的遺物、特に廃棄物である「鉄滓」の自然科学的解析が常識化して、面目を一新した。例えば日本の鉄は専ら中国地方で生産され、他の地方ではその流通と加工が課題であったという戦前経済学の「常識」は、現在では全く覆されたし、わが国の鉄生産は専ら砂鉄に依存し、海外の鉄鉱石（岩鉄）原料とは違う独自の技術であったという「常識」も、そのままでは受け入れられないものとなった。しかしなお残された課題は多い。

例えば、茨城県尾崎前山遺跡の発掘を通じて考古学と自然科学の提携の必要性を説き、それを決定づけた『日本古代の鉄と社会』（平凡社選書）でも、製鉄と鍛冶の出土鉄滓の差異には注目したが、鋼精錬作業に伴う鉄滓は視野にない。そしてこの問題は今や鉄関連遺構解明の最大の課題であり、一部には“チタンが多いから製鉄滓である”というような非科学的な解説さえ行われ、歴史認識を誤らせている。もとより相互批判と仮説検証を通じて進む学問では、過去の業績の中に誤りが一時的に含まれることはやむを得ないであろう。このような新しい共同研究の分野では、常より以上に率直な相互批判と活発な論議、サンプルの再分析などを含めた先人の業績の再検討が、何よりも必要である。そしてまた、擦文文化からアイヌ文化への転換には、「鉄鍋」を初めとする鉄製品と鉄素材の外部からの流入形態の解明が極めて重要な問題なのである。

このような観点に立って赤沼は、北方交易に関係の深い日本海と東北部の所謂「製鉄遺跡」と、北海道で流通していた鉄器に対し、自然科学的手法による再検討を行い、これが砂鉄を原料とする日本独特の所謂「鋳押」技法による「直接製鋼」の製鉄遺跡とその産物ではなく、鉄素材が海から運び込まれたことを主張する。そして福田は、その説が文献的にも受け入れられることを明らかにする。